

大阪市立今里小学校 令和元年度 校長経営戦略支援予算【加算配付】実施報告書  
(補足説明資料)

○年度目標と取組の設定について

本校では、学力向上についての年度目標を次のように設定した。

【全市共通目標】平成31年度の小学校学力経年調査における同一の母集団での比較

① 標準化得点を、いずれの学年も前年度より向上させる。

② 正答率が市平均の7割に満たない児童の割合をいずれの学年も前年度より2ポイント減少させる。

【学校目標】平成31年度末の校内児童アンケートの「わかるまでくりかえし勉強をがんばっている」での肯定的な回答の割合を75%以上にする。(平成30年度 68.4%)

平成30年度の経年調査結果を受けた学力向上推進委員会での検討により、

①短時間学習や読書タイムが確実に取り組める日課時間割の設定

②授業で学習内容の定着に活用するプリント教材の統一

③短時間学習に個に応じた進度が選べるプリント教材の導入

等の取り組みを今年度より始めている。

また、本校の教職員はICTを積極的に活用しており、児童もタブレット端末の扱いに慣れ意欲的に学習に活用してきている。基礎的基本的な学習の振り返りや定着にもタブレット端末を活用し、個に応じた学習指導を効果的に進めていくこととした。

1. 取組内容について

1-1 取組を実施する必要性

平成30年度の小学校学力経年調査においては、標準化得点は概ね市平均である。正答率が市平均の7割に満たない児童の割合が高く、学力の2極化が顕著となっている。主体的・対話的で深い学びの授業実践を進めるとともに、学力課題のある児童が基礎基本の学習内容を身につけられるよう、個に応じた指導を進めることが急務である。

平成30年度は漢字検定を校内で学年2回実施し、各回の再テストもすることで振り返り学習に取り組めるようにした。目標を持って学習し、成果が見えるようにすることで学習意欲の向上につなげてきたが、漢字の読み書きが苦手な児童は、教科書や調査問題の読解にも課題が大きく、スモールステップで達成感を積み重ねることで意欲を持って学習を続けるようにすることが必要である。

1-2. 取組を実施することにより期待できる効果

ICTを活用した個に応じた学習指導の実施により、児童が「わかった」「できた」という喜びを感じることで「わかるまでくりかえし勉強をがんばる」ことが期待できる。

### 1-3. 具体的な実施内容

児童の学習意欲と基礎的基本的な学力の向上をめざし、習熟度別指導、補充学習、短時間学習にドリルプリントとともにタブレット端末等のICTを活用して、個に応じた学習指導をすすめる。具体的な実施内容としては、次のとおりである。

- ・授業、短時間学習でのタブレット端末を活用した個に応じた指導
- ・キーボード入力による読み書きの力の向上
- ・校内漢字検定（11月・2月）に向けた漢字学習（漢字学習アプリの活用）と事後指導

### 1-4. 取組に対する達成状況（A～D）及びその評価理由

- ・取組に対する達成状況：B
- ・評価理由：

学力経年調査の結果からは、前年度を上回る目標は達成できない学年があった。また、年度末の臨時休校により3学期のしんだん、漢字検定は最終の取り組みまで実施できなかった。短時間学習や隙間時間にICTの活用も含めたドリル学習を行うことで、校内児童アンケートの「わかるまでくりかえし勉強をがんばっている」での肯定的な回答の割合が90.9%という結果となり、大きな成果をあげることができた。

以上の成果から、B評価とした。

## 2. 総論

### 2-1 年度目標の達成状況、総評

上記の取り組みにより、「小学校経年調査における標準化得点を、同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より向上させること」について、結果はほぼ全市平均と同等（R1標準化得点 99.875）といえるが、全学年向上の目標は達成できない学年があった。しかし、校内児童アンケートの「わかるまでくりかえし勉強をがんばっている」での肯定的な回答の割合が90.9%と大きく目標を上回る成果をあげることができた。また、児童は日常的なタブレットの活用により、操作に慣れキーボードでのローマ字入力の技能も向上してきており、情報活用能力の向上につながっている。

### 2-2 学校協議会における意見

- ICT機器の活用は、これからの時代を生きる子どもたちにとって、必須なものであり、それについて本年度研究に取り組み、主体的・対話的な学びが深められていて、素晴らしいと思う。今後とも研鑽し、教育活動の推進を図ってほしい。